

芸術文化学部における国際交流のありかた 中国視察報告を兼ねて

山田 眞一* 林 暁** 玉井 泰子***

要 旨

キーワード：中国美術学院，華東師範大学，湖北省博物館，兵馬俑博物館，
西安歴史博物館，湖南省博物館，浙江省博物館，近代建築

はじめに

平成17年10月1日を以って、富山県内の三国立大学が再編・統合することになり、現高岡短期大学、富山大学、富山医科薬科大学の3大学は廃止され、新富山大学が誕生する。高岡短期大学は新富山大学の芸術文化学部として再出発することになり、芸術文化学部は、芸術文化の振興という21世紀の社会のニーズに応えるため「感性と知性のバランスのとれた」人材育成を目標に掲げた教育体制を取るようになる。教育の国際化が重視され、旧来の受信型の教育から発信型の教育へとパラダイムの転換が求められており、大学を取り巻く環境は激しく変化している。そうした状況下において、芸術文化学部としても海外の大学との交流を積極的に行うことは、時代の趨勢に合致しているといえる。今日の社会において、大学には、国際競争力を高め、優れた人材を育成するという役割が求められており、その社会的責務を果すために、国際交流においても戦略的なビジョンが求められているのである。芸術文化学部にとって、その教育理念に沿った、海外の教育機関と交流協定を結ぶことは、単に受験生へのアピールといった近視眼的なメリットにとどまらず、大学が果すべき社会的役割に照らした、長期的展望に立った芸術文化学部の発展・進化的なためにも欠かせないものとなる。

本報告を執筆するにあたっての役割分担は以下のとおりである。視察の目的、準備段階、訪問先の大学の教育組織については山田が、教育内容については林と玉井が、博物館については林が、日程と建築・街並みについては玉井が分担執筆した。なお、今回の中国視察に際しては、平成15年度学長裁量経費の補助を受けていることを明記しておく。本学においては、学長裁量経費等公的資金による海外視察や在外研究を行った場合、その報告を紀要に掲載することが義務づけられていることを申し添えておく。

1. 目的

高岡短期大学は、地域ビジネス学科、産業造形学科、産業デザイン学科の3学科体制で「実学志向」の教育が行われており、これまでに大学間交流として、中国大連外国語学院（1996年11月締結）、フィンランドラハティ・ポリテクニク（1997年11月締結）、アメリカウエスタンオレゴン大学（2003年3月締結）の3つの大学と交流協定を結んでいる。大連外国語学院とは地域ビジネス学科国際中国語コースの学生の現地研修を中心とした協定覚書に基づき、語学研修、日系の中国進出企業への訪問といった内容の研修を行ってきた。ラハティ・ポリテクニクとは、産業造形学科、産業デザイン学科との間で交流が行われており、学生の相互交換、作品展の相互開催、作品展に合わせた交流提携先での講演、単位相互認定といった文字通り相互交流の形態がとられている。ウエスタンオレゴン大学との間では、平成16年度でまだ2回めではあるが、全学的な観点から学生の現地研修プログラムが企画され、語学研修、ホームステイをはじめとする多様なメニューに基づく研修が行われている。この研修は参加者の好評を得ているのみならず、高岡短期大学を受験する動機として、ウエスタンオレゴン大学での研修への参加を挙げる受験生も少なくなく、高岡短期大学の魅力ある科目のひとつとして注目されている。富山県内国立三大学の再編・統合により、高岡短期大学地域ビジネス学科においてこれまで行われてきた「実学志向」

*地域ビジネス学科 **産業造形学科 ***産業デザイン学科

の教育は、新大学の五福キャンパスに設置される、新人文学部、新経済学部が引き継ぐ形で再編されることになり、そのために現地域ビジネス学科の教員の多くが新人文学部、新経済学部へ異動（高岡短期大学の学生として入学した学生が在籍する間は、芸術文化学部との常勤兼任）することになっている。このような新大学、新学部設置という状況の変化に伴い、芸術文化学部における国際交流の提携先・交流形態・内容なども、高岡短期大学とは異なる、新富山大学芸術文化学部の教育理念に適した交流のありかたが求められることになる。以上述べたような大学を取り巻く環境の変化に対応するため、我々3名は、芸術文化学部における中国での交流提携先として、どのような教育機関が相応しいか、学生の研修場所としてどのような場所がより教育効果の大きなものとなるか、といった観点から、平成16年3月上旬から中旬にかけ10日間にわたり中国視察を行った。視察の概略については、学内においてはすでに平成16年5月に「中国視察報告会」を行っており、本報告の内容は報告会で行ったものと重複する部分があるものの、新学部の国際交流についての考え方的一端を学外へも示すという意味から、本紀要にこの中国視察報告を掲載する次第である。

2. 準備段階

芸術文化学部としての国際交流において我々がまず考えたことは、双方の学生・教員にとってメリットのある相互交流を想定した交流提携を結ぶことができる相手先を探すということである。そのためには、交流協定先の教育理念、教育カリキュラム等について調査するとともに、可能な限り授業の現場を見学することで、より具体的な教育の実情に対する情報を得る必要があると考えた。新富山大学の芸術文化学部は、現高岡短期大学の産業造形学科と産業デザイン学科を中心に再編・統合し、それに新たに建築系が加えられ、履修コースから見て5つのコース（リテラシー・教養を含めると6つのコース）に分かれるという教育体制がとられることになっている。国際交流という視点から双方にとってメリットがある交流として重要なことは、教育面において相互に特徴的なものを提供しあい、学びあうことでお互いに得るものがあるということであろう。そこで訪問先の候補を絞る際に、高岡短期大学の特徴であり、それを継承する芸術文化学部においても同様に教育上の特色となる、伝統工芸（漆工芸、金属工芸、木材工芸）を学ぶ学生に加え、芸術文化学部として新たに加わる建築系の学生にとっても教育上のメリットが考えられるということを第一に考えた。

中国の芸術系大学は全国各地に存在しており、大学の歴史、立地場所、教育体制の充実度、さらには芸術文化学部との具体的な交流形態の可能性などを考慮しながら、中国美術学院（杭州）、華東師範大学（上海）、西安美術学院（西安）を視察先に決めた。また、芸術文化学部においても、「学習の場をキャンパスの外にも求める」という高岡短期大学の教育方法上の特色を継承すべきであることから、芸術文化学部で学ぶ学生にとって魅力があり教育効果が期待できる大学以外の研修場所（博物館や建築物）についても、可能な限り調査することとした。

中国との交渉においてはとりわけ人的ネットワークを通じたアプローチが重視されることは、周知の事実である。幸い、中国作家協会会員でチベット大学講師でもある金偉氏（平成16年11月現在、京都大谷大学研究員）の「関係網」を通じ、先にあげた大学関係者を紹介していただくことができ、大学の渉外担当者との間で訪問時期や訪問内容についての交渉が始まった。ところが出発直前になり、西安美術学院から、一旦は訪問を承諾した日時の都合が悪くなったため、別の日への変更を提示された。その時点では、以下に記すような「厳しい」スケジュールの変更は無理であったため、西安美術学院への訪問は諦めざるを得なくなった。しかし、訪問はかなわないにしても、中国の古都、西安においてなんらかの人的「関係」を結ぶことは新学部のためにメリットになると考え、金偉氏から紹介された、陝西考古学研究所の張建林氏と連絡を図ることにした。しかしながら、同研究所の副所長でもある張氏は漢墓の発掘調査中で、日本からはついに連絡がとれず、中国に着いてから再度連絡をとることにして、日本を出発することにした。

3. 日程

諸般の事情から我々が出発したのは、年度末の忙しい時期で、限られた期間内により多くの視察場所を訪問するため、武漢、西安、長沙、杭州、上海の5都市（移動総距離約5,000キロメートル）をわずか10日間で見学するという、通常の旅行コースでは考えられないようなハードスケジュールであった。視察日程の概略は以下の通りである。

3月7日（日）

13：45発 関西国際空港から上海国際空港へ。上海で国内線に乗り換え武漢空港に20：20到着。宿泊先へタクシーで移動。近代建築様式の江漢飯店にて宿泊。

3月8日（月）

朝8：45に出発し9：00から湖北省で発掘された漆器や銅器など20万点を展示している東湖湖畔にある湖北省博物館を見学。

11：00博物館内にて楚国の伝統音楽の楚東編鐘演奏を聴く。

黄鶴楼近くで昼食後、江南三大名楼の黄鶴楼を見学。その後に近代建築様式の武昌蜂起軍政府旧址を見学。夕方に市内の中心に位置する江漢路に残る租界時代の重厚な石造りの西洋建築群を見学後、宿泊先へ。

3月9日（火）

9：30 清時代に創建された帰元禅寺を見学。道教寺院に隣接する精進料理店にて昼食。

その後、武漢現代美術博物館へ。次の移動の為、14：00に市内を出発。

16：45に武漢空港を出発。18：20に西安空港に到着。出迎いの候憲武氏の案内で宿泊先へ移動。夕食は水餃子専門店とする。宿泊先に戻り22：00に、連絡が取れた陝西考古学研究所の張建林氏と宿泊先のロビーで会う。今回の視察の目的などを話し、西安美術学院の教員に関する情報や漢墓の壁画などのお話を伺う。



3月10日（水）

8：00出発。ガイドの候氏とともに郊外の秦始皇帝兵馬俑博物館へ。1号坑から3号坑、秦銅車展覽館を見学。午後、市内に戻り陝西歴史博物館内の展示品を見学。14：30より同じく陝西歴史博物館内の特別公開の唐時代の壁画を見学。16：00より陝西省博物館（碑林）へ移動し見学、その後明代城壁と鼓楼を見学。

3月11日（木）

7：00に宿泊先を出発。9：00の飛行機で西安空港から長沙へ移動。午後、長沙市内の書店にて資料となる書籍を購入し、しばしの休息をとる。

3月12日（金）

9：00に前漢時代の馬王堆から出土した漆器や銅製品、絹織物など展示している湖南省博物館を見学。午後からは中国四大書院である湖南大学構内の岳麓書院を見学。

3月13日(土)

午前中、長沙市内の馬王堆の古墳へ。建築材料販売地域見学後、長沙周辺部の民家を見ながらタクシーで空港へ。

14:10発の飛行機で杭州へ。杭州に15:30着。夕方、中国美術学院の書道科に留学中の高岡短期大学地域ビジネス学科国際中国語コース卒業生の今井梨絵さんと宿泊先のロビーで待ち合わせ、会食後、明代の街並みを復元したという通りを見学。

3月14日(日)

午前中、浙江省博物館へ今井さんの案内で見学。昼食を楼外楼で頂く。午後、金石篆刻の研究施設である西泠印社へ見学。その後移動し、中国美術学院の留学生寮内を見学させて頂く。夜、中国美術学院の留学生日本人2名 スリランカ人1名 韓国人1名、中国人1名の学生とともに会食しながら、中国美術学院の教育内容について情報収集。

3月15日(月)

9:00に中国美術学院へ。外事課課長の楊修憬副教授と会う。その後外事課職員の張丁氏とともに30分ほど車で移動した象山キャンパスにある「芸術設計職業技術学院」(3年制)を訪問。王其全副学長と面会後、彫刻、陶芸、資料室ジュエリー科の教室を見学、説明を受ける。副学長を含む教員10名ほどと農村レストランで会食。その後、本部の大学内、彫刻、国画科などを案内してもらおう。夜、中国美術学院国際教育学院長である任道斌教授、沈浩講師に加え留学生2名、中国人学生1名と会食しながら、国際教育学院の教育内容、留学生受け入れ状況等について情報収集。

3月16日(火)

9:00に本部校舎前で外事課の張丁氏と落ち合い30分ほど車で移動した「濱江キャンパス」にある設計学院(デザイン)へ。副学院長の趙燕教授らと会い、その後ビジュアルデザインコース、工業デザインコース、建築コースの校舎など大学内を見学。午後14:45に杭州発の特急列車で上海へ移動。16:45に上海に到着し、宿泊先へ移動。



3月17日(水)

10:00に華東師範大学へ。芸術教育学部の張岱樹学部長に会い、教育内容について質疑応答。大学内の施設参観後、職員用のレストランで会食。留学生寮にて留学中の高岡短期大学地域ビジネス専攻科1年生森田瞳さんと会う。16:00移動し旧上海城の北東部に位置する庭園の豫園へ。

3月18日(木)

朝6:30に宿泊先を出発し上海空港へ。9:00発上海空港より関西空港12:30着。JRで高岡着17:40。

4. 訪問した芸術系大学の概要と教育内容

先にも述べたように、今回の視察では、芸術系の大学として、当初の予定では、中国美術学院（杭州）、華東師範大学（上海）、西安美術学院（西安）の3大学を訪問する予定であったが、直前になって西安美術学院への訪問ができなくなり、その結果、大学としては、中国美術学院と華東師範大学の2校を訪れた。時間的な条件が許せば、これに加えて清華大学芸術学部（旧中国工芸美術学院が清華大学と統合）を訪問先に加えたかったが、スケジュール的な制約からと、清華大学芸術学部とはすでにある程度の人的つながりができていたので、別の機会に譲ることにした。日程にも記したように、中国美術学院では2日間、華東師範大学では半日間の訪問時間であり、まさしく「馬に乗って花を見る」ような、駆け足の訪問ではあったが、基本的な状況については、把握できた。訪問した2大学の概要と教育内容について、以下に記す。

4.1 中国美術学院

中国美術学院は景勝地として有名な西湖の畔に本校がある。前身は「国立芸専」と呼ばれた国立芸術専科学校である。1928年に国民党政権での教育行政指導者の蔡元培の唱導により国立芸術学校である西湖芸術院として杭州に設立され、後に杭州芸術専科学校と改名され初代学長は林風眠であった。1937年に日中戦争勃発と共に湖南に移り1938年に北平芸術専科学校と合併し国立芸術専科学校となった。1939年には昆明に移り、1941年には四川璧山松林崗に、1943年に重慶磐溪に更に移った。日中戦争終了後に再び杭州に戻り、国画系、西画系、彫塑系、図案系の学科があった。1950年に国立芸術専科学校は中央美術学院華東分院として改組され、1954年に中国画と西洋画の両系が中国画系、油画系、版画系となり付属中等美術学校が付設された。1956年に図案系と中央美術学院実用美術系を合わせて中央工芸美術学院として独立させて、1958年には浙江美術学院となり独立し、工芸美術系が増設され装演美術、染織美術、陶瓷美術の三専攻に分かれた。1994年に中国美術学院と改名した。学校としての規模やレベルを見ても中国では第一級の美術系高等教育機関である。受験生の人気も非常に高い。2003年の場合、1,500名の学生募集に対し、7万5千人が受験し、500箇所の試験場で、4日間にわたる試験が行われたという。試験期間中は、交通警察が交通整理をするほどであったという。中国全土から優秀な学生が集まっているものと考えられる。

現在の校舎は昨年（2003年）12月にできたばかりで、一見するととても中国の伝統芸術を講ずる学び舎とは思えないほどの現代的な建物で、「中国美術学院」という大学名を記したプレートがなければ、そこが大学とはとても思えないほどである。われわれが訪問したときは、ちょうど新婚カップルがウエディングドレスを着たまま、記念写真を撮っていた。

現在の中国美術学院の本部は、風光明媚な西湖湖畔の「南山キャンパス」にあり大学本部と造型学院がある。設計学院（デザイン）のある「濱江キャンパス」は銭塘江の南側に位置する。もうひとつのキャンパス「象山キャンパス」は南山キャンパスの南西約15キロメートルにあり、約93ヘクタールの広さを持つ。この象山キャンパスには、視覚芸術学院、成人教育学院、芸術設計職業技術学院があり、このほかにも、上海に上海設計学院がある。

大学の教育組織としては、以下に詳述するように20あまりの専攻を持ち、学生数5,000名あまり、教員数500名あまりに上る。昨年作られたばかりの大学案内と、楊外事課課長の説明を総合すると、中国美術学院の教育機構は表1のようになる。

中国においても日本同様、大学間の統合が進んでおり、中国美術学院も他の芸術系の大学や専科学校（2ないし3年制の短期高等教育機関）と統合した結果、現在の規模になっている。中国美術学院は（1）の「造型学院」と（2）の「設計学院」が本部直属の2大「学院」で、「視覚芸術学院」「成人教育学院」は分院のような位置づけになる。また「芸術設計職業技術学院」は、独立法人格を有しており、組織的には中国美術学院の下部組織ではあるものの、運営面では、院長にかなりの権限が与えられている模様である。

表 1

(* 本 = 本科生, 修 = 修士課程在籍 博 = 博士課程在籍, 数字は学生数を表す。なお「学院」は日本における学部より大きい単位に, 「系」は日本における学科・学部の間単位に相当する)

1	造型学院 (本1,200;院200~300)	中国画系(本200,修50,博20)
		書法系(書道)(本100,修多数,博10)
		油画系(本60,修20,博20)
		版画系(本80,修10,博10)
		彫塑系(本120,修20)
		総合芸術系(ミクストメディア)(本60,修20)
		新媒体系(ニューメディア)(修10)
		史論系(本50,修20,博30)
		造型基礎部(300)
2	設計学院(デザイン) (本1,600~2,000, 修100~150,博10)	視覚伝達設計系(ビジュアルコミュニケーションデザイン)(本300,修20)
		染色・服飾系(本200,修10,博若干名)
		陶磁芸術系(本100,修多数)
		工業造型系(インダストリアルデザイン)(本150,修10)
		環境芸術系(本100,修10,博若干名)
		建築芸術系(本50,修10)
設計基礎部(本500,修10,研究生10)		
3	視覚芸術学院(ビジュアルアート) (本2,000,院20)	絵画,彫塑,壁画,美術教育,動画,室内設計,商業撮影, 工業造型設計,装飾芸術
4	上海設計学院(デザイン) (本1,200,院多数)	ビジュアルコミュニケーションデザインコース,環 境芸術コース,染色・服飾デザインコース,インダス トリアルデザインコース,マルチメディア・ホーム ページデザインコース。
5	成人教育学院(400)	中国書画コース,絵画コース,アートデザインコースなど。
6	国際教育学院(約100)	留学生教育機関。中国画,書道,中国文化研究, 中国語教育など。
7	芸術設計職業技術学院(900)	平面芸術デザインコース,工業製品デザインコース, 環境芸術デザインコース,特殊工芸美術コース,ア ニメーションコース。三年制の独立法人資格。
8	付属高校(450)	1929年に創設。

この他の機構として、芸術史学研究センター、美術史研究センター、現代書法研究センター、芸術現象学研究センター、中国書画鑑賞センター、建築营造研究センター、色彩研究所、展示文化研究センターを有し、さらには、中国美术学院美術館、潘天寿記念館、皮影博物館、校史陳列館などの付属施設と、中国美术学院出版社（1985年設立）を有している。

卒業生の40%近くは美術教師や職業芸術家になるという。残りの60%近くは一般企業のデザイン部門やデザイン会社に就職するとのことである。

中国美术学院の海外との大学間交流は現在、ドイツ、フランス、ロシア、アメリカ、日本、など行っており、今後拡大する方向にある。大学間交流の形態はさまざまであるが、「学院」単位の交流というより、「系」単位での交流が中心に行われている。日本の大学との間の交流協定としては、武蔵野美術大学（10年前に提携）、岐阜女子大学（15年前に提携）との間で教官交流、作品展示という形での交流が行われている。設計学院のインダストリアルデザイン系には、早稲田大学に留学していたスタッフ（女性）がおり、彼女が武蔵野美大の教官による日本語での講義を通訳し、中国人の学生がその講義を聴くという形をとっている。岐阜女子大学との間では、毎年、書道系の教員が派遣され、1年間岐阜女子大学で講義・研究をし、書道系のスタッフの中には日本語が堪能なものもいるとのことである。岐阜女子大学からは、毎年30名ほどの学生が、2週間の短期研修を中国美术学院で行い、中国語、書道のほか、蘇州、紹興などを訪れ、中国の伝統工芸の研修も受けるとのことであった。楊外事課長によると、目下、東京芸術大学との大学間交流協定を計画中とのことであった。中国美术学院の大学間交流のあり方で印象的だったのは、設計学院の工業造型系（インダストリアルデザイン）主任の趙陽教授との懇談の中で伺った話である。趙陽教授によれば、大学間交流は、学院や系が中心になってやるという形の他に、個々の教員が個人的な「関係」を基に、特別講義や共同研究といった形で海外の大学の教員と交流をし、それを大学が組織的に支援するという体制ができてきているという。

たとえば、中国美术学院の教員が個人的な関係を持っている海外の大学で研修・講義をするということになると、大学はそれを支援し、在外中の代用講師の手当てにとどまらず、さまざまな便宜を図るということである。こうした個々の教員のもつ人脈を大学の資産とし、海外の大学との関係強化を支援するという考え方は、新大学の芸術文化学部においても積極的に取り入れてもよいのではないだろうか。



楊外事課長との間でも、芸術文化学部との交流形態の可能性について話が及び、楊外事課長からは、個人的な考えだがとしながらも、学生・教員の作品展を相互に開催するような形で交流を始め、交流の進展に合わせて順次、学生の短期研修、学生・教員の相互交換などの交流形態を考えていくのがよいのでは、という考えを示された。

わが芸術文化学部として提携協力を考えられるとすれば、造型学院の中国画系・油絵系・版画系・彫塑系・新媒体芸術系等であろう。中でも中国画系は、人物画・花鳥画・風景画の三専攻に特化されており、徹底した専門教育がなされているので、南宋画の基本などを学ぶ志のある者にとっては格好の留学先となるだろう。また、設計学院には視覚伝達設計系・工業設計系・建築芸術系・環境芸術系等の専攻があって、2,000人規模の学生を擁している。最新の技術を用いたニューメディア等に対しての設備も充実している。



4.1.1 造型学院の校舎について

昨年（2003年）完成したという、新校舎は北京の有名な建築家によるものだそうだ。残念ながら案内してくれた職員が名前を覚えていなかったため、建築家の名前は分からなかった。正門から入ったところの中央階段が全体の中心のようだが、敷地内のそれぞれの



棟も石張りの外壁のデザインと共に統一されている。内部はシンプルだが、ガラスを多用した明るい校舎である。同じ敷地内に留学生用の寮も設けられ、室内はホテル形式になっている。また以前の校舎も写真でみると中国の古典建築のすばらしい校舎であったことが分かるが、デザイン学院の正面入り口にある、蔡元培による学校名「国立芸術学院」の題字を花崗岩に刻印したものだけが、当時を偲ばせる唯一のものである。

4.1.2 設計学院（デザイン）について

新校舎から30分ほど離れた所に設計学院（デザイン）の校舎がある。ビジュアルコミュニケーションコース、ファッションデザインコース、セラミックコース、産業デザインコース、環境コース、建築コースが設けられている。



今回はその内のビジュアルコミュニケーションコース、産業デザインコース、建築コースに関して校舎内の見学と説明を受けた。それぞれ最新のコンピュータとグラフィックス関係のソフトが充実しており、産業デザイン学科の廊下には学生が制作したという携帯電話等のデザインCGが飾られていた。モデリングルームも広々としており、制作工具が備えられ学生が制作中であった。



建築コースの校舎見学時にはちょうどOHPを使っでの授業が行われており、学生達は熱心に話を聞いていた。建築のCG演習の授業もあり、壁面に3Dソフトで制作した作品が張り出されていた。使用ソフトは不明だが、高いレベルに達しているようである。また日本では見かけられないが、建築模型専用の制作室も用意されている。



今回の見学から言えることは、大学全体の学生レベルが高いことや、充実した環境の中で制作活動が行える点において、新大学のデザイン・建築系の学生が留学した場合、今の中国の発展を間近に感じることに加えて、多くの刺激を受け十分な成果が得られるであろうということである。



4.2 華東師範大学

華東師範大学は、新中国成立まもない1951年10月に、大夏大学と光華大学に、復旦大学（教育学部）、同済大学（動物学部、植物学部）、東亜体育専科大学を統合する形で誕生した、中国教育部（日本の文部科学省に相当）直属の重点大学で、教育系の名門校である。上海市の西部、普陀区に位置する広大なキャンパスは、緑も豊富で水辺の風景等も見られて美しい。内環状線の高架道路がすぐ東側を走っているが、キャンパスに足を踏み入れるとそこが大都会上海であることを感じさせない静けさと落ち着いた雰囲気



気に包まれる。校舎はヨーロッパ風の建築物と伝統的な中国風建築物がほどよく調和しており、別名「花園大学（Garden University）」とも呼ばれている。構内にはアスレチックジム、ボーリング場、コーヒールーム、和食店、キャンパスショップ等を備えて、ユニバーシティと呼ぶに相応しい規模の大学である。15の「学院」と35の「系」、53の専攻からなる総合大学である。約1,100の正副教授で、学生数は本科生12,000名、大学院生4,000名、留学生1,000名という大規模校である。教育系の学部は現在のキャンパスに残し、その他の学部は郊外へ移転する計画があるとのことであった。その中で現在の芸術教育学部が「学院」として組織替えが行われ、「芸術学院」のほか「設計学院」（デザイン）をアメリカとの合作で行う計画があるという。そのことに関する詳細な話を伺うことができなかつたが、多国籍企業ならぬ「多国籍大学」を連想させるような話に、中国の大学改革がいかに社会変化のスピードに対応しているかの一端を垣間見るような思いがした。

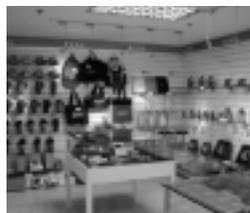
お会いした張岱樹教授の説明によると、芸術教育系は「人文学院」に属し、音楽コース（1年定員30名）と美術コース（同40名）に分かれている。大学院は修士課程のみで、音楽学（同10名）、美術学（同10名）で、そのうちの4分の1が学内からの進学するものであるという。教師は50名おり、20名が音楽コース、30名が美術コースの科目を担当している。元来、教員養成大学であることから芸術教育系においても「全面的教育」という点に教育上の特徴があり、卒業生の進路も、半数近くのものもは中学・高校の美術教師に、そのほかは企業のデザイン部門に就職するものが多い。杭州の中国美術学院に比べると専門性には欠けており、教育学部の美術専攻といった趣がある。



ちなみに、受験倍率は、昨年の場合、美術コースは40名の定員に対して約2,000名、音楽コースは30名の定員に対して約900名の受験者があったとのことである。

学部間の対外交流は現在行っておらず、個人レベルで日本やアメリカから芸術教育系に留学してくる留学生がいるとのことである。留学生に対する中国語教育は「対外漢語学院」が担っており2002年の時点で1,000名余りの留学生が学んでいる。

華東師範大学の芸術教育系における芸術教育は、教師養成を教育目標のひとつに掲げており、新富士大学の人間発達科学部との交流先としてふさわしいのではないかと思う。



学部長の張岱樹先生に案内された大学食堂は、職員専用であったのか、大変美味しい料理で驚いた。また大学内にコンビニエンスストア等もあり、語学研修等で滞在すれば、不自由の無い生活ができるものと思われた。華東師範大学の大学グッズの品揃えにも驚き、中国の今を見せられた思いがした。

5. 博物館について

私（林）が、中国の漆器に興味を持ったのは、東京芸術大学で非常勤講師をしていた時に学生達と行った韓国への研修旅行の折であった。ソウルにある韓国国立博物館内に展示されてあった楽浪郡から出土した漆器を見たことがきっかけである。楽浪郡は紀元前108年に、朝鮮半島で漢の武帝が置いた4つの郡（役所・行政単位）の一つで、漢の東方支配の根拠地で朝鮮や日本に当時の進んだ文化を伝える役割を持っていたわけであるが、その展示されていた漆器も非常に繊細でしかも優美な朱漆による筆描きで装飾が施されていて極めて品格も高く、漆工芸は日本が一番と思っていた私に、少なからずショックを与えた。同行した中国人留学生からも、このような物は中国国内には沢山あることを聞かされていた。そこで、いつかは是非中国を訪れて実物を見たいと思っていたところ、今回の視察で同行した山田先生の多大な協力を得て、実現させることができた。

2000年以上前からこのような精巧で芸術性に富んだ漆工芸が存在していた事実は、現在この道を志す私達にとって、驚くべきことであり、興味が尽きない。しかしながら、様々な歴史の変遷によって、現在の中国の漆工技術はそれほど見るべきものは継承されておらず、日本での発展の方が漆工芸に関しては特徴的であるが、これから漆工芸を志す人にとって是非とも見ておくべきものが本当に数多くあることが分かった。

中国国内の旅行も以前に比べて非常に楽に行けるようになったことなどを思うと、現代中国の発展のダイナミズムを見ることも合わせて、沢山の日本人に現代中国を訪れてみられることをお勧めしたい。

5.1 湖北省博物館（武漢）

長江(揚子江)中流域に位置する湖北省の省都が武漢市である。東湖を望む景勝地の一角にある湖北省博物館は、1999年に新館がオープンした。現在は2棟目の建物を建築中で、完成後は現在展示し切れない品物が並ぶものと思われる。戦国時代から漢代にかけての青銅器や漆器が圧巻で、展示物のほとんどが、1978年に随州市で発掘された戦国時代初期の墓の副葬品であり、出土した青銅器に記された銘文には、楚の恵王が紀元前433年に曾侯乙逝去の知らせを受け、その霊を弔うために贈るとある。このことからこの墓は曾国の侯（爵位）乙（名）のものだと言われ、曾侯乙墓と呼ばれている。出土品15,000点、棺桶、青銅器、楽器、兵器、金玉器、漆器等の貴重な文物である。曾侯乙墓の4つに分かれた木の墓室(木槨)の中には鮮やかな朱漆で紋様を施された木棺が二重に入れ子にされて置かれている。副葬品は青銅製の編鐘(へんしょう)や儀器容器・武器・木棺同様鮮やかで精細な紋様を描いた容器や想像上の動物をかたどった木製品、琴や笙(しょう)・太鼓などの楽器類などなど数々の優品が納められている。青銅で造られた編鐘と呼ばれる鐘は、大小50以上の鐘が組み合わされ、壮大である。後述する湖南省博物館の馬王堆墳墓の出土品に比べると繊細さよりもむしろおおらかでプリミティブな生命観や力強さなどを感じる品々が多く見られ、中でも古代中国の宗教的な世界観を紋様とする器が多く見られた。中にはメインの展示品の「彩絵の蓋豆」のように極めて細かい紋様を彩漆で施された装飾的な形態の器なども見られ、当時の高い工芸技術と審美性が忍ばれる。

この博物館は、写真撮影ができるので、カメラを持参すると良い。これが許されるのも時間の問題かも知れないが、興味のある部分を資料として持ち帰るには格好の条件である。



5.2 秦始皇帝兵馬俑博物館（西安）

始皇帝陵から東へ1.5kmの地点に、兵馬俑坑がある。1974年3月に旱魃に窮した地元農民が井戸を掘り始め、2、3m掘ると変わった陶器の破片が見つかった。この偶然の発見によって、地下に2,000年も眠っていた、兵馬俑がようやく日の目を見た。坑は発掘順序に基づいて一合坑、二号坑、三号坑と名づけられている。全ての坑は、しっかりとした広大なコンクリートの建物で覆われて順路が設けられていて見学して回ることができる。

最大の一号坑は長さ230m、幅62m、深さ5m、総面積14,260平方メートル、兵馬俑の数が約6,000体、二号坑は6,000平方メートル、俑の数は1,000体余り、三号坑は500平方メートル、俑の数は58体に過ぎず、規模が一番小さいが、地下軍団の司令部に当たる。一号坑は今なお発掘を続けているが、中は土掘によって区切られ、上に丸木を掛け、その上にゴザを敷き、表は2mの土によって覆われている。前衛部隊と四周にたっている警備隊に守られ、主力軍は38列に分けられて、東に向かって整然と列を組んでいる。兵隊俑の平均身長は1.8m、胴体は空洞、下半身は詰まっっていて、顔の表情はそれぞれ異なり、身分によって服装もまちまちであり、いずれも手に武器を握っている。一部の俑にはまだ色彩が残っているが、発掘すると直ちに色が褪せて行くという話である。10,000体を上回る兵馬俑は世界的に有名であるが、同時に展示されている銅製の馬車や、付属している銅製の品々に目を奪われた。これらは始皇帝陵の西側20mのところから発見されたもので、当時実用の車の2分の1のサイズで作られ、馬車は二台ある。二台とも四頭立ての馬車で、豪華を極め、車体の内外に美しい模様が描かれている。特に馬車の内部や、展示されているやはり2分の1サイズの銅盾に施された紋様は、そこに使われている材料や技術は特定できなかったものの、極めて精巧で、一分の隙も無いほどに計画的にデザインされた文様と、それ自体の優雅な美しさには圧倒されるものがある。写真撮影は許されている。ミュージアムスコープが必携である。



5.3 陝西歴史博物館（西安）

1991年に開館した博物館で、中国文化の源である西安を中心とした陝西省各地の出土品を収蔵している。唐代の建築様式を取り入れたとても立派な建物で、北京の故宮博物院に次ぐ規模を誇る。113,000点の収蔵品のうち、展示されているのは約3,000点のみである。

展示室は年代別になっており、第1展示室は先史時代から周、秦代までを展示。周代を青銅文化と呼ぶように、この時代の青銅器や陶器が多い。兵馬俑から出土した銅車馬のレプリカや、俑（人形）もある。2階第2展示室は漢から魏晋南北朝にかけての展示室。2階第3展示室は、隋、唐から清代までを展示する。唐三彩の馬などが見られる。また、唐代にアラブ方面から貢ぎ物として贈られたとされるメノウの杯獣首瑠璃杯などがこの目玉であろう。

また地下には各地の陵墓から発見された唐代の巨大な壁画が納められている。この日は特に見学を許され、学芸員の説明を受けながら永泰公主墓や章懐太子墓などから発見された流麗な線で描かれた壁画を見ることができた。色鮮やかな色彩で描かれ、法隆寺の金堂壁画なども連想させる筆のタッチは、当時の東西の交流を思い起こさせる。展示物はもともと碑林博物館に納められていたものが多いが、この歴史博物館ができたことにより、碑林博物館は石碑などの石刻中心の展示となっている。



5.4 湖南省博物館（長沙）

建築面積10,000平方メートル、所蔵品12万点。美しい建物で、大きく「湖南歴史文物陳列」と「馬王堆漢墓陳列」の二つの部分に分かれている。湖南歴史文物陳列は殷・周時代の青銅器と楚の漆木器に特徴がある。馬王堆漢墓陳列は特に内容が見事で、今回見学した博物館の中で、一番の白眉であった。漆器に関しては、2,000年以上前に作られたとは信じられないほど原形を保っており、漆棺の装飾や夾紵胎の箱など非常に興味深く、質の高い展示に感激した。表に展示されていないものの数も膨大であろうことから、長時間かけて研究する対象として相応しい所に思えた。また、馬王堆漢墓出土の美しい刺繍や織の施された絹地も、透過光を利用した素晴らしい展示で、当時の洗練されたものづくりの感覚が手に取るように伝わってくる。こちらミュージアムスコープが有効である。

ここにある有名な女性のミイラは、前漢初期の長沙国の丞相の妻とされるが、2,100年以上前のものにもかかわらず、完全な形で保存され少しも腐乱したところがなく、顔も目・耳・鼻・口・頭髮がほぼそのままに残されていた。皮膚には弾力があり、内臓器官も残って、解剖の結果、死因についての推測も下されている。

この博物館では写真撮影は禁止されている。

馬王堆漢墓は、現在、三号墓をアーチ形の覆いで保護し、一般の見学に公開している。



5.5 浙江省博物館（杭州）

1929年11月に建造された江南園林の特色がある庭園式建築である。杭州の西湖の畔の風光明媚な場所に建てられていて、館内には各種類の文物が10万あまり。歴史博物館、青磁器館、書画館、貨幣館、工芸館、土産物館、国際文科館からなる。新石器時代（河姆渡文化、良渚文化）から近代の文明史まで順を追って観ることができる。一般の人が中国の歴史や文物を分かりやすく理解できるように工夫されているが、展示は観光客を意識してか一般的で、新しい発見を求めるようなマニアックな好みの方には少々物足りないかも知れない。

6. 建築・街並み

6.1 武漢

武漢から今回の視察はスタートした。イメージしていた中国の風景とはかけ離れた近代的なビルが建ち並ぶ中で、猛スピードで走り抜けるタクシーや車、そしてその間を自由にすり抜けて道を渡る人たち、近代と猥雑な街がミックスされていると感じた。その武漢とは長江とその最大の支流漢水の合流地点であり昔から『武漢三鎮』と呼ばれる漢口、武昌、漢陽の三つの地区から成り立っている。昔から交通や商業の町として栄えてきたが、近代ではイギリス、ロシア、フランス、ドイツといった西洋列強の租界が置かれていた歴史がある。いまでも漢口地区の中心街である江漢路には石造りのコロニアルスタイルの西洋建築群が残っており、現在では夕方から夜にかけてライトアップされ、町のにぎわいととも彩りを添え、街のシンボルとなっている。今回の武漢での宿泊は同地区にあるやはり歴史ある近代建築を改装したホテルに宿泊する機会を得た。

また長江大橋を見下ろす場所にそびえ建つ黄鶴楼は南昌の滕王閣、岳陽の岳陽楼と並んで江南三大名楼と呼ばれるそうだが、現在の黄鶴楼は清代のものをモデルに1981年に建てたという新しいものである。その楼の上からは武漢の街が一望でき、20階建て以上はあると思われる真新しい高層マンションビル群、その周辺にはまだかろうじて残っているというような赤い瓦屋根の2階建ての古い街並みが無秩序に立ち並んでいる。

帰元寺は武漢でも最大規模の仏教寺院で清代の順治年間に創建されたが、訪れた日は観音菩薩の誕生日であり、門前には参拝者や物乞いなどがごった返していた。寺院の中は熱心にお祈りをする人々があり、薄暗いお寺の中はお香の煙が充満していた。寺院自体は古いが彩色華やかに新しく塗り替えられていた。また寺院の壁面の窓には花や幾何学模様を用いた中国独特のデザインがバラエティ豊かに見られた。これらのデザインに関しては中国国内では研究も行われているようであるが、日本ではあまり紹介されおらず興味深いと言える。



6.2 西安

かつて長安とよばれた古都西安もまた現在、ものすごいスピードで変化している。最新の空港とそれを結ぶ高速道路が作られ、街までのアクセスが日々変化するという。西安を案内してくれた地元のガイド候憲武氏でさえ道に迷うほどであった。中心部に近づくにつれ大雁塔や小雁塔が見えた。中心部にある鐘楼が街のシンボルとなり、明代城壁が街の中心を囲んでいる。鐘楼のそばには今では少なくなったという古い住居が建ち並んでおり、夜間はその路に屋台が建ち並んでにぎわいを見せていた。西安到着翌日、候憲武氏とともに郊外の秦始皇帝兵馬俑博物館へ向かう。途中の高速道路からは西安郊外のレンガ造りの古い村がいくつも見られ、シルクロードへの入口を思わせる景色である。また崖に直接くり抜いて作られるヤオトン住居らしきものも垣間見られた。

午後を訪れた陝西省博物館（碑林）はもともと孔廟だったところを博物館としたものである。一番奥にある碑林は1087年に創建されたもので、7つの陳列室と6つの廊下、碑亭で構成されている。この構成は中国独自のもので四合院と呼ばれるものに近い、四合院とは東西南北に四棟を配して中央の院子（中庭）を取り囲む形式を基本とする。この博物館はその基本構成を後方へ繰り返しており、建築を専攻する者にとってその構成は空間を考える上で参考となるであろう。夕刻にはそびえ立つ明代城壁と鼓楼に上り城壁の上から市内を一望した。



6.3 長沙

長沙はこれまでの都市より小さいが町並みは緑豊かで近代的である。日本の企業も多数進出しているようである。市街地から少し外れた馬王堆の古墳へ行くまでには建築材料販売地域があり、建築資材から什器まで何でも揃っており、中国の建設事情を垣間見るチャンスであった。見学空港から中心街までの農村は区画整理もされていない田園地帯や丘陵地帯に伝統的な形式の住宅がちらほらと見える。そのほかはコンクリート造りの二階建てが多く、のどかな田園風景にも近代化が進んでいるようである。



6.4 杭州

空港から市内へ高速道路をタクシーで移動する。その途中の住宅街では農民の家だそうだが、どれも大きな3階建ての家である。家の上にはTVアンテナのような塔が建っているが、タクシーの運転手の話では10年前に流行った装飾だそう。よく見てみると一軒一軒デザインが異なる、エッフル塔のような形状のものもあれば、仏塔の屋根の頂部にある相輪のようなものもあり、これらを飾ることで住宅の豪華さを競っていたのであろうか。中国での現代住宅に対する価値観の一端が垣間見られる。

浙江省の省都である杭州市は西湖を中心とした街であり、これまでの都市の中で一番あか抜けしている街の印象が強い。タクシーの運転も穏やかで、街に歩いている人の服装もこれまでの都市より洗練されている。

この街も例外ではなく建設ラッシュであり、西湖の周辺を中心に開発整備が行われ、ショッピング街やカフェが設けられている。新しい建物はチャイニーズモダンを意識しているようである。中国の建築雑誌を見ていると、日本での和のブームのように中国でも伝統的な建築の良さを現代建築に活かそうとする流行があるようである。

また街の中心街には明代の街並みを復元したという通りが作られ、さながら明治村のようなたたずまいとにぎわいである。その一軒一軒を見ているとそれぞれ微妙にデザインが異なり建物と建物の間の屋根には、日本と同じような延焼を防ぐ卯立が見受けられ、日本の建築のルーツを感じる一瞬である。



6.5 上海

上海は言うまでもなく中国の中でも飛び抜けて発展してきた大都市である。上海駅からタクシーに乗車したときからこれまでの都市とは異なることが実感される。交通ルールに則り運転される車、信号を待つ人々、日本では当たり前になっている光景であるが、中国ではなぜかそれまでの都市と比べ新鮮な光景であった。

歴史的には18世紀から19世紀初期にかけての租界時代の上海を最も代表するのは外灘、通称バンドと呼ばれる地帯である。ここにはイギリスを筆頭に列強各国が建てたビルが建ち並んでいる。バンドで一番古い建物であるイギリス領事館はヴェランダ植民地様式であり、1929年に竣工した和平飯店北楼はパーマー＆ターナーの設計によるアン女王復古様式であり、大半を占めるのがネオ・ルネサンス、ネオ・バロック様式である。やがて欧米で流行したアール・デコ様式が上海に移植されている。1985年その対岸である浦東新区開発プロジェクト構想により、壮大な都市計画が行われ、この地域を副都心とする世界の有名建築家による超高層ビル群が対照的に建ち始めている。

また江南地域には中国の古典庭園の中でも優れていると言われる豫園があり、石材を用いて構成された見応えのある庭園である。そしてその近隣には里弄住宅という租界時代に大量に流入した中国人難民の為にイギリス人が伝統的住居を改良して作られた住居群が見受けられる。後に近代住宅のモデルとして中国各地に広まったというその住居群は歴史的地区に指定されているところもあれば、新しいマンション群の開発と隣り合わせの地域もあり、時代を感じさせるこの住居群や生活を見られるのもあと少しであろう。



その他、見学したものには1933年にL・ヒューイックによって設計されたD・V・W邸が挙げられる。これは中国でのモダニズム建築の先駆けとして建てられ、当時日本の建築雑誌にも取り上げられている。内部を見ることは出来なかったが外観は現在もほぼ建設当時のままであり、現在ではカフェとして使用されているようであった。



6.6 建設ラッシュ

これまで5つの都市に共通していることは土木工事から住宅まで建設ラッシュと言うことである。至る所に新興住宅街の垂れ幕と看板があり建設している。杭州では3年前に建てられた建物を壊し新しい建物が立ち、上海では3年前に買ったマンションが倍以上の価格となっているという。日本からも有名な建築家が進出しており、これからの中国の建築界へ影響を与えている。あと4年で北京オリンピックである。そのときまでに中国は激変していくであろうが、その中で中国の歴史的街並み・住居などがどの様に守られ、また変化していくのか、建築的に注目するところであろう。

7. まとめ

中国の芸術系大学を視察して一番強く感じたことは、大学改革が社会の変化のスピードと歩調を合わせるかのように、急速に進んでいるということである。日本でも国立大学が国立大学法人となり、いわゆる「金太郎飴」式の従来の国立大学ではなく、それぞれの大学が「個性」を打ち出した新たな大学のアイデンティティーの形成を余儀なくされている。高岡短期大学が芸術文化学部として新たに船出をするにあたり、高岡短期大学地域ビジネス学科がこれまで築き上げてきた「実学教育」を新大学の新人文学部や新経済学部継承していくことはもちろんのこと、芸術文化学部としては、環日本海に位置する新富山大学のアイデンティティー形成のよりどころとなるような、確かな戦略的なビジョンを持ってスタートをきることが望まれる。国際交流の戦略的ビジョンの一例として、たとえば、高岡短期大学とラハティ・ポリテクが行ってきたような、協定を締結する大学間の相互交流となるよう、留学生の「受け入れ」と海外への「派遣」を一体的に推進するといった、国際交流のあり方が考えられよう。入学者の市場を国内だけに限る理由がなくなりつつある今日において、どのような経営者マインドに立って新大学、新学部を立ち上げ運営していくか、国立大学は法人化したことにより、以前にも増して強いリーダーシップが求められている。

参考文献

1. 中国都市と建築の歴史 都市の史記 張在元著 鹿島出版界(1994年)
2. アジア都市建築史 布野修司編/アジア都市建築研究会執筆 昭和堂(2003年)
3. 図説上海 モダン都市の150年 村松伸-文, 増田彰久-写真 河出書房新社(1998年)